

ゴールドの使い方が以前とは違ったものになっていて、驚きました。実に美しい使い方です。金は制御するのが非常にむづかしい色だと思うのです。クレムソンレーキとかコバルト・ブルーといった原色と張り合ってしまうからです。

金をうまく使った作品は、近代の洋画でも少ないと思います。思い出すが、モネの有名なゴールドの睡蓮やカミュー・ピサロの風景画（紅葉した葉の輝きを出すのに、実にうまく使っています）、グスタフ・クリムトの「接吻」（ルネサンス以前の宗教画のような使い方です）などがあげられるでしょう。

ただ、松田さんの使い方は、こうした洋画家とは違って、今回はもっとずっと制御して使っていて、淡い色にも実にマッチしたほんとうに上品な使い方でした。

また、何よりも、その世界観が日本だなと感じさせるところも個性的であり、とてもいいと思いました。日本人だなと思うのは、曲線の使い方もあると思います。例えば、ピカソなどもその曲線が実に美しいのですが、ある意味、生命感に溢れすぎていて、グロテスクに感じてしまうことがあるのです。でも、松田さんは、生け花にもあるような凜とした生命の輝きはあるものの、「もののあわれ」を感じる曲線だと思うのです。それがすごく癒されると思いました。

音楽之友社元編集部長

ジャパン・ミュージック・ワークス監査役

秋場慶一